

# 近世後期における農民金融の展開

安 澤 み ね

1. 問題提起
2. 農民金融の展開と地域分布
3. 農民金融における資金需要の類別
4. 貸付とその返済状況
5. 貸借関係訴訟出入りの事例
6. むすび

## 1. 問題提起

近世後期とくに宝暦～寛政期（18世紀後半）から幕末期を経て明治（19世紀前半）に至る100年間は、農村における貨幣経済がいちじるしい発展をとげ、幕府および領主による農本主義的農村支配の政治力が次第に衰退し、新しい経済体制が確立され進展していった時期である。いわゆる農民的商品生産の展開である。林令子氏の説明によれば「利潤獲得を目的とした新しい性格の商品生産が展開し……これによって農民は、獲得した貨幣を、農業生産力増大のため農具・肥料や、農産物加工のための道具購入に投下することが可能となり、購買のための販売ではなく、販売のための購買がおこなわれ、恒常的な商品生産が農村内部に展開することになった。<sup>1)</sup>」という。しかし農民の貨幣取得の機会増大は、従来の自給的消費生活を脱して、生活のための消費財購入という新しい生活パターンへの移行をも可能にした<sup>2)</sup>。農民的商品生産は、たんに市場を対象とする農産物（食料及び工業用の原料・材料）の供給を行なうことにとどまらず、農村内における加工業をも発展させた<sup>3)</sup>。その必然的な結果として、生産者と市場との媒介者として、大小の仲買・買次問屋といった流通の担い手が農村内部から発生してきた。「在方商人」の出現である<sup>4)</sup>。

農民的商品生産の展開を背景として、在方商人の活動が活発となり、地域市場が拡大すると、農村における貨幣経済の進展、言いかえればその貨幣流通量の増大と流通速度の加速化は、従来われわれが漠然と考えていたものをはるかに超えていたのではないかと推測される。幕末期武州八王子宿の「稿市」は1ヵ月6回開催され、「銭」の両替高が「一市」で1千両、1ヵ年間は約7万両に達したということであるが<sup>5)</sup>、「実際の取引高がこれを上回るものであったことはいままでもない<sup>6)</sup>。」また同宿の「稿買」仲間のうち、町方稿買数より在方稿買数の方が圧倒的に多かったと同時に在方稿買仲間の流動性（市場への参入・退出）が高かったと言われる<sup>7)</sup>。このことは在方商人の存在形態とその特質を示しているのではないであろうか。また織物の原料となる生糸を取扱う「糸商商人」の地域的分布をみても、在方商人の存在が大であったという<sup>8)</sup>。養蚕・製糸・機織は「作間稼」ぎとして、この地域の農家の副業であった<sup>9)</sup>。在方商人の

方が個々の零細な生産者＝農民との取引において有利であったと考えられる。

先学諸氏により、すでに近世後期農民層分解に関する研究は十二分に行なわれ、農村における社会階層の新たな段階とその展開が明らかにされている<sup>10</sup>。従来、個々の農民の農業経営の基盤となる耕地の保有量（一般的には生産力を示すものとしての米量「石高」で表示される）の増減が、その経営規模の大小と社会階層との対応関係のなかで、経済的福祉（貧富）の指標とされてきた。しかし、商品生産と在方商人という市場経済のメカニズムに組み込まれる段階

表1 連光寺村農民「分散」（破産）時における負債状況

年 号 (西曆)	百 姓 名	負 債 総 額	居 村			他 村			
			件数	債権者数	金 額	件数	債権者数	金 額	町村数
天明 4 (1784)	①市郎兵衛	金 4兩3分2朱 銭 2匁807文	26 <sup>件</sup>	21 <sup>人</sup>	金 4兩2分2朱 銭 2匁807文	1 <sup>件</sup>	1 <sup>人</sup>	金 1分	1
天明 4 (1784)	②喜 兵 衛	金 10兩3分 銭 24文	9	9	金 4兩2朱 銭 3匁000文	5	5	金 6兩 銭 900文	3
天明 6 (1786)	③幸 七	金 4兩2朱 銭 1匁200文	14	14	金 3兩2分 銭 1匁200文	3	3	金 3分2朱	3
寛政 1 (1789)	④甚右衛門	金 4兩3分2朱 銭 2匁550文	10	9	金 3兩3分2朱 銭 2匁550文	2	2	金 1兩	2
寛政 2 (1790)	⑤幸 太	金 27兩1分2朱 銀 8匁5分 銭 16匁359文	10	10	金 8兩2分 銭 2匁224文	17	17	金 18兩3分2朱 銀 8匁3分 銭 14匁132文	11
寛政 3 (1791)	⑥次郎兵衛	金 2兩1分 銭 4匁327文	11	11	金 1兩2分 銭 4匁327文	2	2	金 3分	2
寛政 5 (1793)	⑦平左衛門	金 13兩3分2朱	6	6	金 7兩2分2朱	2	2	金 6兩3分	2
文政 4 (1821)	⑧倉右衛門	金 21兩1分 * 銀 3匁9分 銭 5匁260文	12	11	金 6兩 銭 1匁966文	6	7	金 7兩2分 銀 3匁9分 銭 520文	5
文政 7 (1824)	⑨平右衛門	金 49兩 銭 15匁747文	24	17	金 22兩3分2朱 銭 7匁400文	26	19	金 26兩 銭 8匁347文	8
文政10 (1827)	⑩五兵衛 後家千代	金 16兩 銀 12匁 銭 28匁738文	13	13	金 10兩 銀 12匁 銭 12匁824文	9	9	金 6兩 銭 15匁914文	6
天保 2 (1831)	⑪音 次 郎	金175兩3分1朱 銭 2匁888文	7	7	金 60兩2分2朱	22	22	金124兩1分1朱 銭 2匁888文	15
天保 5 (1834)	⑫米 藏	金 22兩3朱 銭 56匁480文	11	11	金 9兩3分2朱 銭 39匁456文	10	10	金 12兩1分1朱 銭 17匁024文	8
天保 8 (1837)	⑬吉 藏	金 33兩2分 銀 5匁7分 銭 13匁517文	8	6	金 16兩 銭 4匁928文	8	7	金 17兩2分 銀 5匁7分 銭 8匁589文	6
慶応 1 (1865)	⑭源 次 郎	金 61兩2分3朱	14	10	金 36兩2分3朱	4	3	金 25兩	3
明治 2 (1869)	⑮健 藏	金113兩3朱 銀 5匁 銭 25匁660文	14	14	金 50兩2分3朱 銀 5匁 銭 5匁072文	12	12	金 62兩2分 銭 20匁588文	8

\* ⑧倉右衛門 負債総額のうち金6兩2朱（質代金）、金1兩2分2朱と銭2匁774文（小作金）は債権者不明のため、居村・他村別の項には入っていない。

に到達した時点では、農村の経済構造はより重層的となり、農民所得の源泉はより多様化していったと考えられる。とすれば、農民の土地保有量とその生産力を示す「石高」表示を基準とする社会的階層区分は、すでに近世前期程にはその意義をもたなくなっているのではないだろうか<sup>1)</sup>。勿論土地保有量―「石高」の高さは農業経営規模の大きいことを示し、所得の相対的高さをあらわしていることは事実である。しかし市場経済の成立した社会においては、富の大きさは保有する貨幣量によって決定される。すなわち貨幣収入の大きさが問題となってく

合 計		他 町 村 名 (カッコ内は債権者数)
件数	債権者数	
27	22	三沢(1)
14	14	江戸(1), 黒川(1), 関戸(3)。
17	17	本宿(1), 乞田(1), 長山(1)。
12	11	乞田(1), 矢の口(1)。
27	27	関戸(5), 一の宮(1), 寺方(1), 矢の口(1), 是政(1), 小野(1), 図師(1), 本宿(1), 大倉(1), 八王子宿(1), 府中宿(3)。
13	13	菅(1), 河内(1)。
8	8	江戸(1), 関戸(1)。
18	18	江戸(2), 関戸(1), 乞田(1), 矢の口(1), 大丸(1)。
50	36	府中宿(6), 府中分梅(5), 一の宮(1), 谷保(1), 小野宮(2), 菅(1), 戸倉(1), 神州(1)。
22	22	江戸(2), 関戸(1), 乞田(1), 貝取(1)上石原宿(1), 長沼(2)。
29	29	江戸(2), 八王子宿(2), 府中宿(1), 府中分梅(2), 関戸(1), 乞田(2), 細山(2), 小野宮(1), 坂浜(1), 小野路(3), 菅(1), 大蔵(1), 大作(1), 別所(2)。
21	21	江戸(1), 府中宿(1), 府中芝間(1), 関戸(3), 百(1), 国領(1), 長沼(1), 連返(1)。
16	13	府中宿(1), 石原宿(1), 関戸(2), 中河原(1), 矢の口(1), 長沼(1)。
18	13	関戸(1), 菅生(1), 小野路(1)。
26	26	江戸(1), 関戸(5), 坂浜(1), 有山(1), 百(1), 大丸(1), 高石(1), 屋敷分(1)。

るわけである。この場合、農業経営規模、言いかえれると「石高」の低いことが、必ずしも貨幣収入の低いことを意味するものではないといえることができる。近世後期の農村には、前述のような貨幣取得の機会が増大し、それを契機として社会階層の上下の流動性も高まってきたのである<sup>12</sup>。

以上のような農村生活の変貌は、当然農民の生活向上、消費水準の上昇をもたらしたと考えられる。衣・食・住・其の他生活全般にわたって出された「奢侈禁止令」・各種の「法度」・村落内部での「掟」・「議定」の類は幕末に至るほどひんぱんに繰返されている<sup>13</sup>。幕府・藩等における経済政策の失敗・領主財政破綻の立て直し、支配権力の回復のために、都市・農村を問わず一般庶民の生活の引締めを計ったものであるが、ほとんどその効果を発揮し得なかったのが実情であった<sup>14</sup>。

農村における貨幣経済の進展は、とくに農民生活の諸相を変えていった。その一つが「農間渡世」のうち消費需要に対応する農村小売業の発生である。衣類をはじめ生活用具・生産用具・日用雑貨は勿論、穀類・青物・肴（魚）の小売までが農村内で行なわれた。これら農村小売業の多くは寛政期以降とくに文化・文政期に開業している<sup>15</sup>。一般農民の消費増大、いいかえれば所得増加が開始されたのがこの時期であることを示唆するものと思われる。

近世後期農民金融の展開は、上述のような農村地域の貨幣経済の進展を背景に、貨幣流通の媒体としての役割を果たしたのである。本稿においては、個々の貸借の状況、資金需要の原因・返済形態、とくに農民金融の地域的拡大の範囲について実証を試みるものである。

## 2. 農民金融の展開と地域分布

わわれはすでに前稿において、農民金融の諸条件（貸付金の規模・信用形態・利子率）について検討した<sup>16</sup>。本稿においては、まず貸借関係にある農民の地域分布の状況とその拡大範囲について検討を試みるものである。表1は武州多摩郡連光寺村農民の「分散」（破産）事例にもとづいて、分散時におけるかれ等の負債状況を示すものである<sup>17</sup>。分散についてはすでに紹介したが、特にかれらの負債に対する債権者＝貸付主の地域的分布について、居村と他村及びその地域（村名）を明らかにした。負債総額の大小にかかわらず、負債件数及び債権者数は最小が8件8名、最大26件26名と比較的大きな数値を示し、1件当り貸付規模の小さい、いわゆる「小口借金」が多いことが知られる。これら小口の負債が積って、負債総額が当人の資産や信用の範囲を上廻る額に達し、分散処分をうける事態に落ちいったのである。

負債額・負債件数・債権者数のそれぞれについて、居村・他村別構成比率を示したものが表2である。負債件数・債権者数については、いづれも居村のそれより他村の方が大きい場合が15例のうち⑤⑨⑪⑬の4例にすぎない。残る11例の場合は居村内の農民間貸借が圧倒的に大きい。しかし負債額に関しては、他村からの借り入れ額の方が大きいもの②⑤⑧⑨⑪⑬⑮の7例となり、負債額1件当りの規模は他村の方が大きいということが理解出来る。また居村での借入総額が、他村のそれよりわずかに上廻るとは言え、両者がほぼ相半ばしている⑦⑫の2例を加えると、15例のうち60%がその資金調達の大半を他村に依存している。試みに分散処分をう

けた農民の1件当り負債額を居村と他村にわけて試算してみると(表3)、事例⑩⑪の場合、両者の差は僅少であるし、⑪の例<sup>19</sup>でも総額では他村への依存度が67%と高い数値を示している。

表2 連光寺村農民の分散(破産)時における負債状況(構成比)

年 号 (西暦)	百 姓 名	件 数		債 権 者 数		負 債 金 額	
		居 村	他 村	居 村	他 村	居 村	他 村
天明 4 (1784)	① 市 郎 兵 衛	96%	4%	95%	5%	95%	5%
天明 4 (1784)	② 喜 兵 衛	64	36	64	36	43	57
天明 6 (1786)	③ 幸 七	82	18	82	18	81	19
寛政 1 (1789)	④ 甚 右 衛 門	83	17	82	18	81	19
寛政 2 (1790)	⑤ 幸 太	37	63	37	63	29	71
寛政 3 (1791)	⑥ 次 郎 兵 衛	85	15	85	15	75	25
寛政 5 (1793)	⑦ 平 左 衛 門	75	25	75	25	53	47
文政 4 (1821)	⑧ 倉 右 衛 門	67	33	61	39	47	53
文政 7 (1824)	⑨ 平 右 衛 門	48	52	47	53	47	53
文政10 (1827)	⑩ 新左衛門 後家千代	59	41	59	41	59	41
天保 2 (1831)	⑪ 音 次 郎	24	76	24	76	33	67
天保 5 (1834)	⑫ 栄 藏	52	48	52	48	51	49
天保 8 (1837)	⑬ 吉 藏	50	50	46	54	47	53
慶応 1 (1865)	⑭ 源 次 郎	78	22	77	23	59	41
明治 2 (1869)	⑮ 健 藏	54	46	54	46	44	56

表3 1件当り平均負債額

	居 村	他 村	銭 相 場 (両=付)
①	銭 1,214 <sup>貫 文</sup>	銭 1,475 <sup>貫 文</sup>	銭 5,900 <sup>貫 文</sup>
②	銭 3,038	銭 7,260	銭 5,900
③	銭 1,586	銭 1,750	銭 6,000
④	銭 2,541	銭 2,950	銭 5,900
⑤	銭 5,322	銭 7,493	銭 6,000
⑥	銭 1,139	銭 2,100	銭 5,600
⑦	銭 7,371	銭 19,575	銭 5,800
⑧	銭 3,497	銭 7,976	銭 6,700
⑨	銭 6,885	銭 7,221	銭 6,900
⑩	銭 6,479	銭 6,435	銭 7,000
⑪	銭 51,964	銭 34,035	銭 6,000
⑫	銭 9,691	銭 10,075	銭 6,800
⑬	銭 14,016	銭 15,810	銭 6,700
⑭	銭 17,558	銭 61,452	銭 6,700
⑮	銭 34,814	銭 51,195	銭 9,500 ※

※ 明治2年の銭相場不明のため、一応慶応3年のそれを用いた。

いま寛政12年（1800）以前と以後、すなわち18世紀後半と19世紀前半に区分して、それぞれの状況をみると、前者では居村内での貸借関係が圧倒的に大きな比率を示しているのに対し、後者すなわち19世紀に入るとこの関係は逆転し、金融資金の供給が居村から他村に移り、地域的拡大の傾向がみられる。いわゆる化・政期と呼ばれる社会的にも経済的にも比較的安定した状況のなかで、元禄期につぐ高い文化の形成期でもある。また都市文化が農村に伝播し、この時期に農村生活の諸相に変化を引き起す諸要因の萌芽があらわれはじめる。社会経済の新たな局面への移行が文政期（1818～1829）から展開されはじめ<sup>18</sup>、やがて安政の開国へと向う幕末の変革期に突入する。このような社会的経済的変転の時代には、進取の精神と才覚（能力）をもって新しい時代に巧みに対応し成功するもの、或いは志を果し得ず没落するといった変動は何時の時代でも変らない。また市場経済の拡大にともない豊富に供給される消費財にひかれて、思わぬ借財に身を沈めるものもあらわれる。まさに閉鎖的な村落生活から、開かれた社会への移行が農民の生活圏の拡大をもたらし、その中に人々の多様で複雑な関係を形成していったのである。

農民金融の地域的分布とその拡大の状況を、やはり18世紀末と19世紀前半に区分してみると、表1「他町村数」の項に示したように、前者では⑤の11カ村を除いて、近隣1～3カ村にとどまっている。ただし⑤においては勿論②⑦においても江戸の町人との間に貸借関係をもっていることは注目に値する。このことから、かれ等が在方商人であったことは明白である。19世紀に入ると、他村の数が5カ村～12カ村へと地域的分布の拡大がみられる。

以上述べた他村債権者の地域を村別にみると、江戸及び3宿40カ村にのぼっている。連光寺村を中心に、これらの地域的分布を図1に示した。村名及び債権者数（カッコ内数字）をあげると次のようになる。

江戸（10）、府中宿（12）、八王子宿（3）、上石原宿（2）、関戸（20）、府中分梅（7）、乞田（6）、小野路（4）、長沼（4）、矢の口（4）、一の宮・細山・百・菅・大蔵・本宿（以上6カ村各2）、中河原・小の宮・府中芝間・有山・長山・落川・河内・四ッ谷・寺方・図師・是政・大丸・黒川・坂浜・落合・連返・三沢・谷保・国領・菅生・下染谷・屋敷分・戸倉・高石・大作（以上25カ村各1）、他に神州とあるのは信州のことかとも思われる。

連光寺村富沢奥右衛門家の貸付先も、安永5年（1776）の「勘定帳」では居村及び江戸・八王子・府中の3町方と関戸・長山・乞田・小田分・青木場の5カ村にすぎなかったが、奥右衛門の子宗左衛門の「文化14年勘定帳」には居村の他に江戸・府中新宿・豊田の3町方及び関戸・一の宮・寺方・和田・乞田・是政・大丸・原新田・の8カ村の名がみえている。さらに文化13年（1816）から弘化3年（1846）までの31年間の貸付金未済分の書上げ帳には、居村（45）及び江戸（2）の他に、関戸（15）・一の宮（16）・坂浜（6）・寺方（4）・原（8）・大塚（4）・落川（8）・百草（1）・上和田（1）・小田分（3）・乞田（10）・貝取・有山・大丸・常久・久米川・府中分梅・府中新宿・下小金井（以上8カ村各1）の19カ村をかぞえる<sup>20</sup>（カッコ内数字は各村々での貸付件数である）。

信州安曇郡保高町村小川家の金融活動における貸付先の地域は（表4）、文化2年（1805）11

図 1

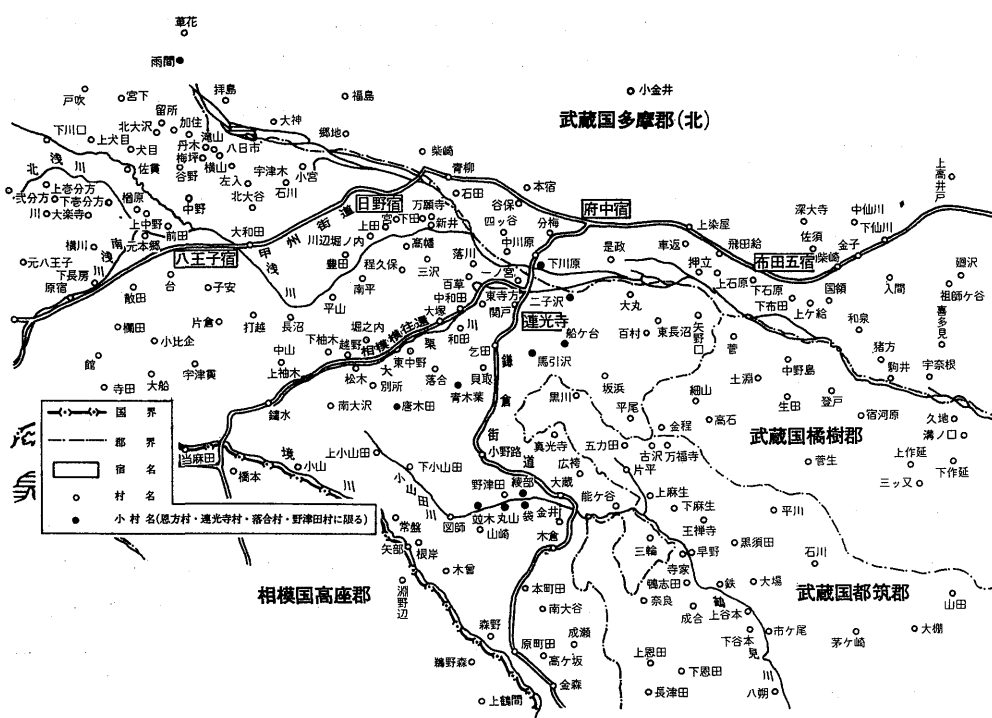


表 4 信州安曇郡保高町村小川家の貸付状況

年号	居 村		他 村			総件数	貸付金総額	指数(文化2=100)	
	件数	金 額	村数	件数	金 額			総件数	総金額
文化 2 (1805)	24	金 35両3分3朱 ( 1. 2. 0)	12	84	金 219両3分0朱 ( 2. 2. 2)	108	金 255両2分3朱 ( 2. 1. 3)	100%	100% (100)
文化10 (1813)	15	( 38. 0. 0 2. 2. 0)	13	105	( 357. 3. 0 3. 1. 2)	120	( 395. 3. 0 3. 1. 1)	111	155 (136)
文政 8 (1825)	20	( 129. 3. 3 6. 2. 0)	20	125	( 539. 0. 1 4. 1. 1)	145	( 669. 0. 0 4. 2. 2)	134	262 (190)
天保 6 (1835)	15	( 98. 1. 2 6. 2. 1)	18	136	( 1,441. 0. 0 10. 2. 1)	151	( 1,539. 1. 2 10. 0. 3)	140	602 (418)
弘化 1 (1844)	19	( 144. 2. 3 7. 2. 2)	24	164	( 1,825. 3. 3 11. 0. 2)	183	( 1,970. 2. 2 10. 3. 0)	169	771 (441)

- 〔註〕 1. 熊井保「近世後期における農村金融」(津田秀夫編「解体期の農村社会と支配」。校倉書房, 1978年所収) 第9(文化2), 10(文化10), 11(文政8), 12(天保6), 13(弘化1)の各表「規模別貸付件数および貸付額」より作成。
2. それぞれの金額欄下段のカッコ( )内数字は1件当たり平均貸付額。指数「総金額」欄下段のカッコ( )内数字は1件当たり平均貸付額の指数。

カ村, 文化10年(1813) 12カ村, 天保6年(1835) 17カ村, 弘化1年(1844) 23カ村(城下松本家中を含む)と, その地域は年を追って拡大していった<sup>21</sup>。当然貸付件数及び貸付金総額も増大し, 約40年間に件数で1.7倍, 貸付金総額では実に7.7倍に達している。播州加東郡中番村農民の文政11年(1828)11月の借財状況をみると, 戸数42戸のうち30名(71.4%)が借銀総

額37,566.9匁の負債をおっている。貸付主は全部で50名いるが、そのうち中番村の農民は11名(22%)にすぎず、残り39名(88%)は他村の者達であった。しかも借銀高のうち居村内で供給された額はわずか銀3,040匁(8%)で、残り92%は他村の者に依存している。貸付主の地域分布は不明の2名を除いて、大阪1名及び周辺20カ村に及んでいる<sup>22</sup>。遠州佐野郡幡鎌村(現在の掛川市域西端)農民の事例では、幕末から明治初年にかけて、全戸数58戸(うち「潰れ」8戸)のうち49戸、すなわちほとんど全世帯が借財をもち、総額は金3,100両に及んでいた。そのうち「質地貸付」569両余(19.2%)、「相対借金」1,069両余(34.5%)で、約54%が一般的な農民金融であった。とくに「相対貸し」の割合が最も高く、幕末期農民金融の特性がここにもあらわれている。幡鎌村農民への貸付主は87名の多数にのぼり、その地域分布は、森町・横須賀町の町方及び佐野郡下の諸村合わせて44カ村に及んでいる<sup>23</sup>。

甲州都留郡平野村伝次郎「家」が、天保期から明治初年にいたる幕末期に行った金融活動は、年間新たに貸付けられた額が天保期では10〜20両程度であったが、次第に増大し文久3年から明治初年には500両前後となり、その金融経営規模がいちじるしく拡大した<sup>24</sup>。とくに「これらの村々は商品流通にかかわっているが、自村においてとくに農業的商品生産を展開させるということはなかったといえることができる。」と指摘されているように、農業経営に適さない山間の村々が、またそれ故にこそ、市場経済の進展のなかで、農民相互の経済関係が深化し、質的にも地域的範囲においても拡大されていったことを示すものと考えられる。

連光寺村の場合、江戸町人との貸借関係が比較的目立つ。しかし多くは地域市場の中心地八王子宿周辺地域を限界に半経約10キロメートルの範囲に限られている。幡鎌村の例でも、北東の森町、南の横須賀町までそれぞれ直線距離で約10キロメートルあり、貸付主の地域分布は掛川宿を中心に半経約10キロメートルの範囲内であったと思われる。保高町村小川家の貸付先は半経約5キロメートルの地域にとどまっていたといわれるが、中部山岳地帯という立地条件のためであろう。勿論それぞれの地域における経済発展の段階にもとづく地域市場の大きさという経済条件の相違もあるであろう。畿内農村における農民金融の地域的分布も、全国市場の中心地大阪及び少数の町方は別として、貸付主の居村を中心に周辺の数カ村から10数カ村の範囲である<sup>25</sup>。

以上のことから、農村金融の地域的分布、言いかえると金融という経済関係をとおして農民相互が接触し得る範囲にはおのずから一定の限界が存在すると言える。主として徒歩による交通が一般的手段であった当時においては、一日行程で往復可能な地域にほぼ限られるということである。さらに重要なことは金融という農民間の信用制度が確立されるための情報交換の密度、すなわちコミュニケーション・システムが成立し得る範囲に限定されるということが考えられる。

### 3. 農村金融における資金需要の類別

農民的商品生産と在方商人の発生は、農民の間にかなりの資金需要をひきおこす大きな要因を生み出した。在方商人の出自が、必ずしも農村内における富裕な上層農民に限られるもので



はなかったという<sup>26</sup>。中小の農民であっても能力があれば在方商人として活躍する機会が与えられた<sup>27</sup>ということは、かれ等にとって貨幣蓄積と必要な資金調達が可能であったことを意味するものである。農民金融がこのような商業資金の供給に大きな役割を果たしたことはいうまでもない。貸付の理由が明らかになっている事例を表5に示した。これは連光寺村名主富沢忠右衛門家に保存された借用証文を表示したものである。40件の貸借のうち、「商売向仕入金」としての借り入れが17件（43%）ある。「無抛要用」或いは「御年貢諸役其外諸賄＝差詰り」等の文言は、従来から借用証文に多く用いられてきた慣用句であり、必ずしも真の理由を示すものではない。勿論事実生活困窮のための借金もふくまれているが、借主の名前から、明らかに商業を営む者であることがわかる。万五郎・源兵衛・栄次郎・金助（事太郎吉）等がそれである。とくに借り入れ金額の大きいものはほとんど商業資金と見做して差支えないと思われる。

連光寺村利兵衛の場合「無抛要用」のため金1両2分を借用し、その返済引当に「娘二人奉公稼」を条件としている。また江戸四ッ谷伝馬町のひでという者への貸付は「恩借」無利息で、しかも10カ年という長期のものである。これら2件は明らかに生活資金としての借財であることが理解出来る。

市場向け農民の商品生産に必要な用具・肥料・或いは原料等の購入という資本投下のための資金需要も多くなる。これらは直接的貨幣金融のみではなく、多くは買掛代金未払分としての負債になっている場合が多い<sup>28</sup>。

19世紀に入ると農村内に「農間渡世」小売業の数が急激に増加することはすでに述べた通りであるが、農民生活の消費需要がこの時期に拡大してきたことが第1の理由にあげられる。幕末期には幕府によってしばしば「農間渡世」調査が実施されたり、「村明細帳」が作成され提出されている。これらの史料によって当時の農村内小売業の実態を知る手掛りが得られる。天保14年（1843）八王子宿を中心に、周辺農村32カ村（八王子町方は除く）に総数311軒の農間渡世（主として小売業）が存在していたという<sup>29</sup>。1カ村当たり平均9.7軒となるが、勿論個々の村落規模が異なるから、この数値はあまり意味がない。従って実際の村落規模と農間渡世の関係をみなければならない。

安政2年（1855）「八王子宿組合村々地頭姓名帳」には八王子宿を中心とする組合村35カ村の明細が記るされている<sup>30</sup>。このうち先にあげた32カ村のうちの28カ村がふくまれていることが判明した。残る4カ村については不明であるが、この28カ村の家数合計は1,922戸、人口は8,837人である。これから推測すると32カ村の戸数は約2,000軒余、人口は約9,000人余と考えられる。とすればこの地域の農間渡世は戸数約7軒に1軒、人口約30人に1軒の割合で分布していたことになる。しかも八王子宿にも多くの小売業が存在していたし、周辺農民は八王子市での消費財購入も行っている。32カ村のうちの1つ小比企村の元文2年（1737）の村明細帳には次のように述べられている。「当村の儀ハ、蚕村中ニて仕、女稼仕候。大積り金高三十兩程売申候。年々高下御座候。万買物之儀ハ八王子町ニて道法一里ほどまいり、諸事用相達シ申候事」<sup>31</sup>。しかも当時すでに村内には次のような農間渡世が存在していたのである<sup>32</sup>。

布・木綿き（着）商売 1人

表5 農民金融の状況

番号	年 月 (西暦)	貸 付 主	借 受 主	貸付金額
①	寛政 3. 2. (1791)	連光寺村 甚五左衛門	上和田村 伝 八	金 1. 0. 0. <small>兩分朱</small>
②	寛政 3. 7. (1791)	連光寺村 甚五左衛門	上和田村 伝 八	金 5. 0. 0.
③	文政 5.11. (1822)	連光寺村 忠 右 衛 門	下長房村 藤 藏	金 30. 0. 0.
④	文政 6. 3. (1823)	連光寺村 忠 右 衛 門	大 丸 村 五 兵 衛	金 16. 0. 0.
⑤	文政 7. 3. (1824)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 利 兵 衛	金 1. 2. 0.
⑥	文政 7. 8. (1824)	連光寺村 忠 右 衛 門	大 塚 村 内 藏 之 助	金 1. 0. 0.
⑦	文政 7.11. (1824)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 政 右 衛 門	金 32. 0. 0.
⑧	文政 8. 3. (1825)	連光寺村 増 五 郎	連光寺村 半 兵 衛	金 16. 0. 0.
⑨	文政 8.12. (1825)	小の宮村 多 吉	連光寺村 増五郎・音次郎	金 32. 0. 0.
⑩	文政 9.11. (1826)	連光寺村 増 五 郎	連光寺村 清 左 衛 門	金 16. 0. 0.
⑪	文政 9.12. (1826)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 金 助	金 9. 3. 0.
⑫	文政 10. 3. (1827)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 兵助・幸右衛門	金 12. 0. 0.
⑬	文政 10. 3. (1827)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 庄 左 衛 門	金 6. 0. 0.
⑭	文政 11. 3. (1828)	連光寺村 金 助	関 戸 村 源 右 衛 門	金 12. 0. 0.
⑮	文政 11. 3. (1828)	連光寺村 増 五 郎	貝 取 村 傳 左 衛 門	金 32. 0. 0.
⑯	文政 11. 7. (1828)	連光寺村助成金 (村役人)	連光寺村 萬 五 郎	金 2. 0. 0.
⑰	文政 11. 7. (1828)	連光寺村助成金 (村役人)	連光寺村 吉 藏	金 2. 0. 0.
⑱	文政 11. 8. (1828)	連光寺村助成金 (村役人)	連光寺村 源 兵 衛	金 3. 0. 0.
⑲	文政 11. 8. (1828)	連光寺村助成金 (村役人)	連光寺村 金 助	金 2. 0. 0.
㉑	文政 11.12. (1828)	連光寺村 増 五 郎	連光寺村 栄 次 郎	金 10. 2. 2.
㉒	文政 12. 3. (1829)	連光寺村 金 助	貝 取 村 勇 七	金 12. 0. 0.
㉓	文政 12. 3. (1829)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 音 次 郎	金 5. 0. 0.
㉔	文政 12. 5. (1829)	連光寺村 増 五 郎	太 丸 村 五 兵 衛	金 16. 0. 0.
㉕	文政 12. 7. (1829)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 金 五 郎	金 3. 0. 0.
㉖	文政 12.12. (1829)	連光寺村 忠 右 衛 門	府中分梅 長 兵 衛	金 4. 0. 0.
㉗	天保 1. 3. (1830)	連光寺村 金 助	連光寺村 源 兵 衛	金 6. 0. 0.
㉘	天保 1. 7. (1830)	連光寺村 宗 左 衛 門	小金井村 勘 之 丞	金 10. 0. 0.
㉙	天保 1. 7. (1830)	連光寺村 宗 左 衛 門	小金井村 勘 之 丞	金 6. 0. 0.
㉚	天保 1.10. (1830)	連光寺村 忠 右 衛 門	関 戸 村 嘉 助	金 3. 0. 0.
㉛	天保 2. 4. (1831)	連光寺村助成金 (村役人)	連光寺村 吉 藏	金 1. 0. 0.
㉜	天保 5.11. (1834)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 太 郎 吉	金 2. 0. .3
㉝	天保 5.11. (1834)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 太 郎 吉	金 2. 1. 2.
㉞	天保 5.12. (1834)	連光寺村 金 助	上落川村 清 左 衛 門	金 24. 0. 0.
㉟	天保 6.11. (1835)	連光寺村 忠 右 衛 門	関 戸 村 彦 次 郎	金 12. 0. 0.
㊱	天保 6.12. (1835)	連光寺村 忠 右 衛 門	関 戸 村 彦 次 郎	金 5. 0. 0.
㊲	天保 7. 3. (1876)	連光寺村 忠 右 衛 門	連光寺村 益 五 郎	金 12. 0. 0.
㊳	天保 14.12. (1843)	府中分梅 来 助	連光寺村 甚 五 郎	金 30. 0. 0.
㊴	嘉永 2.11. (1847)	連光寺村 魯 平	江戸 家主忠八 四ッ谷伝馬町 ひで	金 5. 0. 0.
㊵	元治 1. 3. (1864)	石 川 村 成就院内 成 意 老 尼	連光寺村 吉 兵 衛	金 10. 0. 0.
㊶	慶応 4. 1. (1868)	連光寺村 奥 右 衛 門	連光寺村 秀 次 郎	金 15. 0. 0.

利 率 (年)	期 間	貸 付 形 態	摘 要
—	10ヵ月	証 文 貸 付	商売仕入金
—	5ヵ月	証 文 貸 付	商売仕入金
12.5 %	6ヵ年	質 地 貸 付	古着商売当暮仕入金
12.5	6ヵ年	質 地 貸 付	糸商売仕入金
20.0	1ヵ年	娘二人奉公 稼 引 当	無抛要用
—	6ヵ月	証 文 貸 付	差支候儀有之
12.5	6ヵ年	質 地 貸 付	御年貢其外諸賄
12.5	5ヵ年	質 地 貸 付	商売向仕入金
12.5	頼母子講満会まで	証 文 貸 付	商売向仕入金
12.5	4ヵ年	質 地 貸 付	御年貢皆済
—	3ヵ年	質 地 貸 付	御年貢諸役并家内取続方
12.0	9ヵ年	質 地 貸 付	要用ニ差詰リ
12.0	9ヵ年	質 地 貸 付	要用ニ差詰リ
12.0	8ヵ年	質 地 貸 付	要用ニ差詰リ
12.5	1ヵ年	証 文 貸 付	要用ニ差詰リ
10.0	2ヵ年	質 地 貸 付	要用ニ差詰リ
12.0	2ヵ年	証 文 貸 付	綿商売仕入金
10.0	2ヵ年	質 地 貸 付	無抛要用
12.0	2ヵ年	質 地 貸 付	無抛要用
12.5	2ヵ年	質 地 貸 付	無抛要用
12.0	1ヵ年	質 地 貸 付	菓子商売仕入金
15.0	1ヵ年	質 地 貸 付	商向仕入金
12.8	1ヵ年	証 文 貸 付	商向仕入金
20.0	—	質 地 貸 付	夏成金(年貢)并ニ諸賄
—	1ヵ年	証 文 貸 付	古着仕入金
12.0	2ヵ年	質 地 貸 付	御年貢諸役并諸賄
恩 借 (無利息)	5ヵ年	—	勘之丞親八郎兵衛借金ニ付 利金35両は勘弁。年賦返済。
恩 借 (無利息)	4ヵ年	—	
20.0	1ヵ年	質 地 貸 付	御年貢皆済并類焼諸賄
12.0	2ヵ年	「金助頼母子講」 落くじにて	商向仕入金
—	—	相 対 貸 付	水車修履代
10.0	—	相 対 貸 付	元金8両の利息3ヵ年分
12.0	頼母子講満会まで	証 文 貸 付	—
12.0	4ヵ年	証 文 貸 付	商向仕入金
12.0	1ヵ年	証 文 貸 付	商向仕入金
—	頼母子講満会まで	証 文 貸 付	—
12.0	5ヵ年	質 地 貸 付	商向仕入金
恩 借 (無利息)	10ヵ年	相 対 貸 付	無抛要用
相 当 の 利	9ヵ月	証 文 貸 付	商用ニ付借用
—	催 促 次 第	証 文 貸 付	糸仕入金

茶商売	1人
木挽	1人
糸まい（繭）商売	1人
小売酒屋	1人

これは18世紀前半の状態を示すものである。1世紀を経た19世紀のこの村の状況を想像することは容易であろう。

以上のことから、農村における消費水準の上昇と消費金融との関係が推定出来る。同一村落内では零細な小口貸付「相対貸し」が多いことは農民金融の特質の一つである。貸付条件は「相対貸し」すなわち無担保の当座貸しとなる<sup>33</sup>。

さて当時の農村の諸商売にはどのような種類があったのか、さきの311軒の農間渡世をその種目別に6つの項目に分類した内容を引用すると次のようになっている<sup>34</sup>。

1. 穀物（米・雑穀）の主穀食料の小売
2. 味噌・醤油・塩・油・酒・乾魚等の食料品の小売
3. 菓子類・荒物（ろうそく・附木・草履・草鞋・ざる・目かご）等の小売
4. 日常の衣・住に関するもの（古着・傘・下駄・足袋・股引・脚絆等の仕立等）、（建具・畳・大工・左官・屋根ふき・桶屋・唐臼づくり・いかけ屋等）の諸職人。
5. 質屋・穀屋・酒造・織物商・糸商などの問屋・仲買。
6. その他の商人・職人。

信州保高町村の場合。弘化1年（1844）の職業調査に63軒の農間渡世があげられている<sup>35</sup>。これらは延べ数で、1軒で何種類もの種目を取扱っているから、実数はこれより少なくなる<sup>36</sup>。例えば弘化1年（1844）、持高九石余の新吉の店商いの内容は、

酒・油・塩・茶・砂糖・菓子・乾物・青物・食品類・附木灯心・蠟燭線香・元結・扇子・柄杓・芋竹細工・笠・鍬鎌・砥石・針釘・馬道具の雑貨類・売薬類・他に質屋・溜り造り売り  
と多種にわたっている<sup>37</sup>。また保高町村の庄屋小川家も「質屋のほかに店商いを営んでおり、その取扱い商品は、

紙墨筆硯類・太物綿類・酢溜り小売・塩茶小売・蠟燭線香・履物類・瀬戸物類・肴類・売薬類・小問物類・扇子類・針釘類・砂糖菓子類・青物類・乾物類・竹細工類・杓柄類・麻芋・髪油元結・遣い糸水引類・蓆類・笠井傘類・豆腐こんにゃく・刀鎌庖丁類・砥類・古手類井作道具・附木灯心<sup>38</sup>」

と生産の道具は勿論、日常生活に必要な食料品から生活用具の類まですべて供給されている。

このような農村内小売業の発達には、農村における消費需要の増大と、農民の消費水準の上昇を裏付けるものと思われる。農民の貸借関係がこのような消費財の購入を媒介として多発してくるのが幕末期の特徴である。連光寺村百姓の「分散」事例にみられる借財のなかに「米代」「酒代」「青物」等「店借」りの掛買代金がみうけられる。植村正治氏の研究にも「飯料滞」「酒・醤油売掛銀滞」「小袖代銀滞」等消費財買掛代銀に関する訴訟のあることが示されている<sup>39</sup>。寺社参詣の旅行費用、婚礼の費用等、それらの形式が華美になるにつれてこの種の消費

金融も多くなってくる<sup>40</sup>。

以上のように、農村における貨幣需要は、まず（１）生産用の諸道具・肥料のような農業及び農産物加工に必要な生産資金、（２）在方商人の経営資金、（３）消費金融の三つに類別することが出来る。現在のところこれら三つの類型が農民金融に占めるそれぞれのウェイトを明らかにすることは出来ない。史料のうえからは（２）の類型が最も多いように思われる。しかし零細な小口金融（１両未満から５両まで）が件数の上では圧倒的に大きな割合を占めている<sup>41</sup>。従って消費金融も決して少なくなかったと考えられる。

#### 4. 貸付とその返済状況

農民金融の実態について知り得る史料には農業経営の他に商業等を営む富裕な農民が、その資力を用いて金融活動に進出し、年々の経営状態を記録した「勘定帳」、庄屋・名主等村役人或いは金融活動を行っていた農民の手に残された「借用証文」、さらには貸借関係の訴訟の記録等がある。「勘定帳」には貸借関係の条件・開始・完了・継続等比較的詳細な状況が記録されている。「借用証文」については、その貸借の条件・開始時期については知り得るが、関連する史料が無い場合、その貸借関係の具体的な経過・結末について不明な場合が多い。「訴訟出入り」の記録は、借財・買掛金等の返済が滞り、貸借関係がこじれて、最早当事者間の談合が成立せず、債権者から奉行所（評定所）或いは支配領主の役所へ提訴され<sup>42</sup>、その経過を記録したものである。この場合は債権者は勿論債務者に関する比較的くわしい状況、さらにその記録が完全な場合には、訴訟の経過及び結末についての詳細を知ることが出来る。農民金融に関するもう一つの史料に「百姓分散仕法帳」がある。すでに述べたように、借財に関して個々の貸付主からの負債額及びその理由が明記されていることが多い。「分散」（破産）処置においてそれぞれの債権者に割当てられた返済金額、返済金調達のために処分（競売）された家産の代金等をも知ることが出来る。

まず連光寺村富沢宗左衛門家の文化14年（1817）・文政13年（1830）の3冊の「勘定帳」から農民金融の内容について検討してみよう。表6及び表7は文化14年（1817）（それ以前の貸付も含む）の貸付金に関する明細である。この年度の貸付金総額は359両1分2朱と銭820文となる。ここでは個々の貸付金についてその貸借関係の展開に注目したい。われわれが最も関心をもつものは、貸付金に対する返済の経過である。全46件のうち表6の⑬⑭及び表7の①②⑨⑪⑬⑰⑱の9件（20％）が返済を完了している。利息分の支払いが行なわれているものは表6の④と表7の③④⑤⑥⑩⑫⑲の8件（17％）である。以上合せて17件（37％）のものは健全な経営を示すものと考えてよい。また表6の⑤⑥⑬3件の場合のように証文書替えによる貸借関係の継続がみられるが、この場合多くは利息未払い分を元金に繰り入れて新たに証文を作成している。しかし未払いになっている元利合計金額のうち「内金」として何がしかの額が払込まれているが、残額は年賦返済の取極めとなったものが10件ある。表6の②③⑧⑩⑭⑯⑰⑱がそれにあたる。「内金」の払込みの記載はあるが残額についての処置が不明のもの表6の①⑬⑯⑳㉑㉒の6件がみうけられる。また返済状況について何ら記載されていないものに表6の⑩、

表6 連光寺村宗左衛門の貸付状況 I

番号	年 号	借 主 名	貸 付 額	利率(年)	備 考
1	寛政 9.12	落川村 長 十 郎	金 <sup>兩分朱</sup> 2.2.0	—	此2兩取済, 8月中茂七世話にて。
2	文化 12	落川村 武左衛門	8.2.0	10.0%	右金8兩2分入残り金1兩2分は寅・卯兩年受取管。但シ年賦也。
3	文化 13	落川村 忠 七	3.0.0	20.0	右金3兩入。残金2兩は寅・卯兩年に請取管。但シ利無し。
4	文化 3	関戸村 太 七	2.0.0	—	2兩2分2朱取り, 米2俵取り, 残金1兩也。来七月(文政1)受取約束也。
5	文化 13	関戸村 平左衛門	5.0.0	—	丑暮(文化14年)米2俵取り, 残り証文に改め成る。
6	文化 13	関戸村 利右衛門	7.0.0	—	居屋敷にてけや木1本取り, 残り証文に改め成る。
7	文化 13	関戸村 忠 兵 衛	15.0.0	—	右に付証人勘左衛門相手取申処, 欠落致し候ニ付源助殿扱申し金2兩3分ニて内済申候。質地書入
8	文化 2	原関戸村 善 次 郎	20.0.0	—	また22兩入。残金15兩は6カ年賦。 1カ年2兩2分づつ。無利息。
9	文化 10	原関戸村 善 次 郎	10.0.0	—	
10	文化 13	原関戸村 善 次 郎	3.0.0	—	3兩は諸勘定差引にて請取る筈にて内済申候。
11	文化 13	原関戸村 源蔵・忠兵衛	60.0.0	—	原関戸御用金。右の内50兩切金ニ成, 1カ月1分2朱宛ニ被仰付候。
12	文化 11	一の宮村 新 平	3.0.0	15.0	また2兩入。利息92匁2分入。残金1兩3分米証文。
13	文化 13	一の宮村 賦右衛門	7.0.0	—	取り済。
14	文化 11	一の宮村 賦右衛門 寺方村 善 九 郎	4.3.1	20.0	5兩入。残金3兩は1カ年3分づつ4カ年賦可済約束也。証文。
15	文化 13	寺方村 五 三 郎	10.0.0	—	内1兩1分取申12月大晦。内1兩1分取, 子12月6日。
16	文化 5	寺方村 伝 兵 衛	12.0.1	—	寺方用金内7兩入, 残金5兩は質地証文に成。5カ年済切約束也。
17	文化 7	寺方村 伝 兵 衛	5.1.2	—	外ニ午(文化7)より利銀。内3兩取, 残金5兩は預ヶ証文に成。1カ年1兩2分ト永166.6文づつ, 3カ年賦。
18	文化 13	寺方村 善 九 郎	3.3.1	20.0	利銀47匁2分3厘。
19	文化 13	寺方村 善 九 郎	26.3.3	—	毎年米2俵2斗づつ20カ年受取管。
20	文化 13	和田村 文左衛門	7.2.2	12.0	内(文化14年)9月4日1兩取。11月4日2分取。寅(文政1年)8月19日4兩取。
21	文化 13	乞田村 清左衛門	15.0.0	—	内5兩取。右ニ付無尽掛5カ年分差引, 金高6兩の証文に取極め。1カ年1兩2分づつ4カ年賦。
22	文化 2	是政村 甚 五 郎	34.2.1	—	元金34兩2分1朱は5カ年済切約束也。 1カ年6兩3分ト永169.3文づつ。 * 内子年より亥年まで都合22兩1分ト永507文米にて取。右の処え金14兩受取済。飯田町美濃屋五郎兵衛方へ是政村より参り内済申候。
23	文化 12. 3	江戸 芝いさらこ此右衛門	10.0.0	—	他に220匁也。2カ年利分。内丑(文化14)2月4兩取, 9月3兩取。
24	文化 13	大丸村 源 蔵	10.0.0	—	8兩取。飯田町美濃屋五郎兵衛方へ新宿福島屋参り内済致申候。右の処1兩取申, 残金1兩滞り有之。

表7 連光寺村宗左衛門の貸付状況 II

番号	年 号	借 主 名	貸 付 額	利率(年)	備 考
1	文化 13.12	連光寺村 万 五 郎	金 3.2.0 <sup>兩分朱</sup>	10.0%	利銀21匁。此分3兩2分取11月28日(文化14), 利分寅(文政1)11月13日取済。
2	文化 14. 3	連光寺村 万 五 郎	3.0.0	10.0	利銀15匁。元利 $\times$ 3兩ト4匁5分取済。寅3月22日。
3	文化 14. 2	連光寺村 源 之 丞	0.2.0	20.0	利銀5匁5分。丑(文化14)12月28日取済, 利分。
4	文化 13.12	連光寺村 仙 藏	0.2.0	20.0	利銀6匁5分。寅正月16日利分取。
5	文化 14. 2	連光寺村 仙 藏	0.2.0	20.0	利銀5匁5分。利分寅1月16日取。
6	文化 13.12	乞田村 藤 吉	0.3.0	21.7	利銀39匁。此利取。12月29日。
7	文化 13.12	乞田村 太郎左衛門	1.0.0	20.0	利銀12匁。
8	文化 14. 2	乞田村 太郎左衛門	1.0.0	20.0	利銀11匁。
9	文化 14. 3	乞田村 太郎左衛門	10.0.0	20.0	利銀100匁。此金11兩2分取済。11月29日。
10	文化 13.12	関戸村 佐 兵 衛	3.0.0	20.0	利銀39匁。内金1分取。丑12月大晦日。
11	文化 13.12	関戸村 左五右衛門	3.0.0	20.0	利銀39匁。元利合3兩2分取帰り167文受取済, 12月晦日。
12	文化 14. 2	関戸村 源左衛門	10.0.0	20.0	利銀110匁。
13	文化 14. 2	寺方村 幸 七	7.0.0	20.0	利銀77匁。内1兩2朱取。残て7兩ト9匁5分取済。
14	文化 14. 3	原新田 平左衛門	2.0.0	20.0	利銀20匁。 } 本金 $\times$ 3兩。利銀29匁。 利銀9匁。 }
15	文化 14. 4	原新田 平左衛門	1.0.0	20.0	
16	文化 12. 2	豊田町 治郎右衛門	15.0.0	20.0	利銀165匁。内5兩受取, 丑12月。寅2月右利分取, 此金2兩3分也。内3兩入, 寅5月4日残金7兩也。同5月迄利分銀50匁也。
17	文化 14. 3	連光寺村 新左衛門	1分ト820文	—	米代。内金1分ト578文取。残て242文返し, 寅6月11日。
18	文化 14. 6	連光寺村与市・金助	2.2.0	20.0	利銀17匁5分。
19	文化 14. 7	原関戸村 長 七	5.0.0	20.0	利銀20匁。(元利)相済。
20	文化 14. 6	府中 新宿 岩 二 郎	1.2.0	—	
21	文化 6. 2	府中 新宿 岩 二 郎	1.2.0	—	
22	文化 14. 7	原新田 藤 兵 衛	0.2.0	20.0	利銀3匁。内金1分ト3匁也取る, 2月28日。残金1分づつ。

表7の⑦⑧⑫⑭⑮⑱⑳㉑の9件が残っている。これらは当該年度の新貸しであるから、元金・利息共に未だ返済の時期に到っていないと理解出来るであろう。年賦返済及び「内金」として一部返済が行なわれたもの計16件(35%)のものは一見不良債権として健全な経営をおびやかすものと見られがちであるが、当時の慣行として一般的な形式であったのではなかろうか。如何なる経営にもリスクはつきものであるし、この点は利率との関連で検討しなければならない。特殊な事例としては表6の⑦と⑭のケースである。⑦原関戸の忠兵衛の場合、本人が「欠落」(行方不明)しているため、同村源助が世話人となって「分散」処分を行っている。結局

宗左衛門は元金15両に対して2両3分を受取ったにすぎない。返済率は元金の18%となる。源助への貸付条件に「質地書入」の記載はあるが、抵当の土地は宗左衛門の手には入らず、競売にされて「分散配当金」の一部に充当されたものであろう。⑪の同じく原関戸の源蔵・忠兵衛への貸付金60両は領主への御用金で、両人は村役人の地位にあったことが推定される。結局50両は切捨になり、残額10両に対して1ヵ月1分2朱宛の返済ということになった。1カ年では4両2分となる。

表8は同じく宗左衛門の文政13年（天保1年1830）12月「貸金勘定帳」の内容を表示したものである。貸付金合計は51両で従来の年度とくらべて非常に小さい。件数も17件と減少している。これに関して宗左衛門の金融活動が縮小したものであるかどうかはいまのところ明らかでない。個々の貸付額も小額のものが多く、半数以上の9件は1両内外である。貸付年月不明の2件と一の宮重五郎への文政4・5両年の貸付合せて4件を除くと、他は文政10・11・12・天保1年の比較的新しい貸付である。元利完済のもの3件、元金据置き利息分払込み済みのものが5件ある。落川村惣吉への貸付けはいわゆる「恩借」であり無利息で返済は1カ年金1分づつ4カ年賦となっている。双方の間に特別な関係があったものと思われる。居村甚蔵への貸付金1両は数年以上利息滞納となっており、あきらかに不良債権である。残り6件については全く記載がないが、そのうち4件は文政11年（1828）と天保1年（1830）の貸付けで貸付け経過期間は比較的短いものである。一の宮村重五郎の場合は1件当り1～2両内外の小額な貸付けが繰返し行なわれているうえに、利率も15%と当時としては決して高利ではない。重五郎は一の宮村の名主であり宗左衛門との間に特別な関係があったことが推定出来る。

農民金融において健全な経営を維持するためには、定期的な利息の払込み及び元金の返済期日が守られ、相互の信用関係が確立されることである。しかし当時の農民の貨幣収入の不安定さは、現在の農家収入が決して安定しているものでないという事実からも容易に理解出来る。従って貸付け金のなかにはかなり長期にわたって返済の滞るものが出てくるし、史料のうえではかえってそのような場合の記録の方が残存しやすい。何故なら、返済完了の場合には借用証文は借り手側へ返還され、帳簿のなかから抹消されていくからである。宗左衛門の死後、その子造酒三郎が「父宗左衛門代貸金証文面書出覚帳」を作成している（弘化3年（1846）頃）。寛政12年（1800）の1件を除くと他の文化13年（1816）から弘化3年（1846）までの31年間133件が記載され、多くが長期貸付けとなっている。このなかに残っているものは、表5②③の小金井村勘之丞の計16両と表8⑫③寺方村善蔵の計5両、④桑川村伝右衛門の10両だけである。いずれも借り入れ時の元金に相当する額であるから利息分は継続して払込まれていたと思われる。従って表5・6・7にあげられた他の貸付金についてはいずれも貸借関係が完了したものと理解してよい。なお上記134件の未済貸付金のうち46件（34%）はその後返済が完了したことが記されている。たとえば連光寺村市五郎は天保8年（1837）「妻貰受候節」金1両を借用している。この貸付金は天保13年（1842）まで利息が払込まれ、以後元利共に滞納になっていたが20年後の文久3年2月に元利合計4両1分2朱と銭106文を支払って「皆済」となった。4件は「内金」として元金の一部が返済されている。残る80件についてはその後の処理が明ら



表 8 連光寺村宗左衛門貸付状況 Ⅲ

	年 月	借 主 名	貸 付 額	利率(年)	備 考
1	—	上和田村 文右衛門	金 10.0.0 <small>両分米</small>	15 %	元貸未 (元金据置)利銀済。
2	文政 10.10	寺方村 善 藏	2.0.0	20	元貸未 (元金据置)利銀済。
3	文政 12.12	寺方村 善 藏	3.0.0	20	元貸未 (元金据置)利銀済。
4	天保 1. 2	糸川村 伝右衛門	10.0.0	15	—
5	天保 1	糸川村 伝右衛門	7.0.0	—	惣易講落くじにて済。
6	天保 1	糸川村 伝右衛門母	1.0.0	—	天保 2 年済。
7	文政 10	落川村 惣 吉	1.0.0	無利息	1 カ年 1 分づつ 4 カ年賦。
8	—	関戸村 甚 助	5.0.0	—	証文有。
9	—	連光寺村 甚 藏	1.0.0	—	文政 6 年まで利息入, 文政 7 年より滞納。
10	文政 12.12	一の宮村治郎左衛門	1.2.0	20 %	元貸未 (元金据置)。利分済。
11	文政 12.12	一の宮村 忠 藏	1.0.0	20	元貸未 (元金据置)。利分済。
12	天保 1.12	一の宮村 久右衛門	1.0.0	20	—
13	文政 4. 2	一の宮村 重 五 郎	2.2.0	15	—
14	文政 5.12	一の宮村 重 五 郎	0.2.0	15	—
15	文政 11	一の宮村 重 五 郎	1.0.0	15	—
16	文政 11.11	一の宮村 重 五 郎	1.0.0	15	—
17	天保 1. 4	関戸村 弥左衛門	3.0.0	20	元利金取済。

かでないが、特に利息滞納についての記載がない限り利息分の払込みが行なわれていたものと思われる。抵当として「質地書入れ」のあるものも多く、「流地」とならず貸借関係が継続している。証人として「名主・組頭」が保証をしているものもある。従って貸付の長期化をもって直ちに不良債権と断定することは必ずしも当を得ないと思われる。当時の社会慣行についてさらに詳しい調査が必要な課題となるであろう。

## 5. 貸借関係訴訟出入りの事例

連光寺村組頭半兵衛の子万五郎は「農業之間木綿糸商い」を業とする在方商人であった。親半兵衛も同種の農間渡世を営む商人であったことが、前出表 5 ⑧に居村の増五郎から「商売向仕入金」として16両の借り入れを行なっていることから明らかである。万五郎も表 3 ⑩及び表 7 ①②に借り主として名前があがっている。かれ等は機織りを副業とする農民に原料の木綿糸を売捌く糸商人であったが、多くは掛売りであり、売掛け金の回収が長期にわたって滞り、「度々及催促候得共、等閑ニ致、埒明不申、難儀至極仕候」と文政 10 年(1827) 5 月に奉行所(勘定奉行)へ提訴に及んだのである<sup>48</sup>。訴訟の相手は八王子宿を中心にその北及び北西部に散在する村々の者達で、5 宿10カ村19名であった(表 9)。それぞれの売掛金は文化14年(1817)

表9 連光寺村萬五郎の売掛金訴訟出入り

訴 訟 相 手	負 債 額	負債発生の年月
横山村 長左衛門	金 錢 6貫500文	文政6年より 9年まで。
中野村 勇 助	錢 2,920	文政7年より 8年まで。
中野村 郡司・簾藏	錢 56,713	文政7年より 8年まで。
八王子本宿 惣 七	金 2朱 錢 17,607	文化14年より文政5年まで。
八王子本宿 甚 兵 衛	錢 6,738	文化14年より文政5年まで。
八王子本宿 嘉 兵 衛	金 1分 錢 40,471	文政1年7月より9年まで。
八王子嶋ノ坊 源 藏	金 4兩1分 錢 249	文政7年。
八王子横山宿 与右衛門	銀 14匁1分6厘	文政9年。
八王子本郷宿 定 七	錢 2貫911文	文政4年より 9年まで。
草花村 半 次 郎	錢 3,730	文政7年。
下草花村 八郎左衛門	錢 2,360	文政3年。
谷野村 忠左衛門	金 1分 錢 148	文政1年5月。
谷野村 熊 藏	錢 11,758	文政1年4月より4年まで。
引田村 茂 兵 衛	錢 3,127	文政4年。
石川村 磯右衛門	錢 1,988	文政9年。
本郷村 米 八	金 1分 錢 5,021	文政7年より 9年まで。
上長洲村 又 兵 衛	錢 8,969	文政5年。
雨間村 忠左衛門	錢 7,420	文政7年。
武蔵国 多摩郡のうち 5ヶ宿 10ヶ村 相手 19名	金 5兩1分2朱 銀 14匁1分6厘 錢 178貫650文	

から文政9年（1826）の10年間に発生した貸借である。総額金5兩1分2朱、銀14匁1分6厘と錢178貫650文であった。金に換算すると約35兩余となる。金額の大小にかかわらず、「売掛金滞り」の場合には訴訟に持ち込まれる例が多く見受けられる<sup>44</sup>。金銭貸借の場合と売買による貸借関係（特に小規模な）には当事者間の信用の程度に相違があるからだと言えよう。

万五郎の訴訟受理の掛りは勘定奉行曾我豊後守で、直接の担当は「目安御糺 御留役」築山茂左衛門であった。豊後守の他役方9名の名で築山茂左衛門を通じて次の様な「目安」が差出されている。「如斯目安差上候間、其地ニ而埒明事ニ候ハハ、可相済、滞儀有之ハ、致返答書、来ル七月四日評定所江罷出、可致対決、若於不参ハ、可為曲事者也」という内容であった。直ちに相手方19名及びそれぞれの宿・村々の名主・組頭・五人組連名で万五郎宛「拝見証文」が差出された。これによってこの件は「於国許、不残内済」となり、万五郎は6月29日出府し、先づ地頭役所へ出頭し、地頭所役人宛「内済」した旨報告し、翌日「御掛り御奉行所様江着、御届奉申上」る意向を届出ている。なお万五郎から評定所に提出された「差上申御済口証文之

事」によれば、売掛金滞り高金5両1分2朱、銀14匁1分6厘と銭178貫654文のうち、金3両2朱、銀14匁1分6厘、銭120貫100文を受取ることで示談が成立し、残額1両2分と銭56貫654文は万五郎の損金となったわけである。約29%の損失である。

天保6年(1835)4月には連光寺村名主忠右衛門方同居、同人甥新太郎が山本大膳代官所府中宿・日野宿・四ツ谷村百姓4名を相手取り、総額86両の貸付金に関して奉行所へ提訴している<sup>45</sup>。新太郎は忠右衛門の兄弟に当たる府中本町来助の子であったが、「潰れ」となった忠右衛門の分家「新右衛門跡式相続」のため連光寺村に移住したものである。「為取続・親来助が貸金譲請、相手之者共江及催促候処、一同品能申延而已致等、埒明不申難儀至極」であるため出訴に及んだものである。翌5月4日付掛り「隼人」以下10名の役方名で「目安」が出されているが、それ以上の史料を欠くためどのように結着がついたかは知ることが出来ない。

ところが新太郎の親すなわち忠右衛門の兄弟にあたる府中宿本町来助は、嘉永5年(1852)2月に忠右衛門家の分家甚五郎への貸付金30両に関して、奉行所へ出訴している。甚五郎は既に死亡しているので、その後家に入夫した忠次郎が訴訟の直接の相手となっている。この貸付金は、甚五郎が天保14年(1843)12月に「商い向き取続」きのため借受けたもので、名主魯平(忠右衛門の子)が来助に対し「決而御苦勞相懸申間敷、為其証文」一札の書入れを行っている。この貸付金に対し来助側の取立てはかなりきびしく、度々催促を行ったが相手側はそれに応じないため、勘定奉行、掛り池田播磨守へ出訴したが、連光寺村支配地頭役所から「何連も懸合、済方為致度旨申立」てたので、一旦訴訟を取り下げたが、「金子済方いたし候様、精々懸合候得共、不法申居、取散不申候間、無拠破談及断、今般御訴訟奉申上」げることになった。すなわち示談が成立せず再度奉行所へ提訴することになったわけである。親族間においても、場合によってはこのような訴訟出入が起る例である。経済発展が従来の共同体意識にどのようなかわりと変化をもたらしたか、社会意識変革の問題解明という課題が残される。

## 6. むすび

農民の商品生産或いはその流通拡大の資金調達手段として、また一般農民層の消費需要増大にともなう生活資金調達の方途として、幕末期農民金融の存在は農村の社会的経済的発展に大きく貢献している。貨幣経済を媒介として、経済的合理性に基づく農民行動の範囲は、個々の村落規模をはるかにこえて拡大し、社会階層間の流動性をも高めていった。地域間における横の流動性に対し、階層間上下の縦の流動性という重層的な社会変動の波が、個々の農民をさまざまな形でその渦にまき込んでいったのである。一方では土地集積というかたちで資産を増すもの、商業経営に基づく利潤によって富を築くもの、他方巨額の負債を負って分散処分立ち至るもの、債権者から逃れるために「欠落」(出奔)のやむなきに至るもの等、その浮沈の状況もまた多様であった。

個々の農民についても、当人の才覚と努力によって社会的変動の波を乗り越え、一度は破産に立ち至っても経済的基盤を再び挽回するものもいた<sup>46</sup>。経済的破産処分である「分散」によって「潰れ」となり、村落共同体の成員から姿を消すもの(表1①⑥⑪⑭)もあったが、分散

時点で土地も家財も処分し、無高の百姓に下落したが、その後相応の百姓として再起しているもの(表1②③⑪⑬)もみうけられる。天保2年に分散処分をうけた音次所と、同じく天保8年(1837)の吉蔵は、天保9年(1838)「御改革再調家数商人職人取調帳」のなかに、「古着渡世 音次郎」「木綿原綿渡世吉蔵」として書き上げられている。

連光寺村増五郎は親吉兵衛の代から「永田屋」という屋号をもつ「古着渡世」の商人であった。寛政4年(1792)の「田畑屋敷石高控帳」では持高2石9升5合の小百姓であったが、寛政8年(1796)2石9斗6升1合余、文化8年(1811)3石3斗2升6合余、安政5年(1858)4石1斗5升9合余とその所持石高は2倍に増加しているが、慶応3年(1867)には総額2,106両の借財が残り、居宅・土蔵・物置・馬屋等の建物を引当に、22名の債権者に対し「五ヶ年据置、十五年賦返済」を願い出て承認された<sup>47</sup>。持高も万延1年(1860)には一度2石6斗4升9合に減じ元治1年(1864)再び最高の4石8斗4升到まで上昇したが、借財に関連してか慶応期には1石7斗8升5合余に激減している。さきの借財に対する抵当に質地書入れがみえないのは、土地の多くが既に抵当に入っていたためであろう。いずれにしても2千両を超す巨額な負債を負ってなお分散処置がとられなかったのは異例の措置であったと思われるが、在方商人としての増五郎の経営上の信用度が高かったからか、いずれにしても農村における金融貸借関係が質量共に拡大していたことを示す一例である。ちなみに慶応4年(1868)9月の「村差出 明細帳」には「質・古着・糸繭渡世 増五郎」と書き上げられている。

近世後期農村における経済関係のネットワークは、生産・流通・消費の経済的側面から、農村の社会構造を変貌させていった。これらのことから推測すると、幕末期農村における貨幣流通量は膨大なものであったと思われるが、この問題に関する解明は後日を期したい。

#### 註

1. 豊田武・児玉幸多編『流通史 I』218頁。6章第3節参照。(『体系日本史叢書』13) 山川出版, 1969。
2. 正田健一郎編『八王子織物史』上巻, 552頁。「在村々より織物類持参仕, 市場ニ而買方之者江壳渡シ, 右代金を以, 夫々入用之品々買求候」
3. 『八王子織物史』219~220頁。
4. 豊田・児玉編前掲書, 220~225頁。伊藤好一著『近世在方市の構造』(日本史研究叢書 I) 隣人社, 1967。
5. 『八王子織物史』555頁。「八王子宿之儀者, 素々毎月六度之市相立, 一市凡金千両積ニ相捌方可相成旨ニ付, 左候得者, 壹ヶ年見積リ高凡七万両程も相捌き……」
6. 同上, 555頁。「八王子横山宿の百姓重蔵という者が百文銭の引替を六万両引請け, それを果したので, 更に追加引請けをしたい。老朱銀の通用停止後, 百文銭が殊に需要されているので, 是非とも追加引請けを許可してもらいたいといふ願書を出した。
7. 同上, 573~574頁。特に574頁の第72表「寛政~明治初期における綿買人数」及び576頁の第73表「在方綿買の動態」参照。
8. 同上, 413~414頁。とくに414頁の第61表「天保2年糸繭仲間年行事の地域分布」参照。
9. 野村兼太郎著『村明細帳の研究』。伊藤好一前掲書, 134頁。「宝暦9年(1759)の『上大野村差出帳』によれば, この頃村で飼育する蚕は『大糞り金高』で80両余の収入があり, 『当村働出シ候絹紬式百拾両余』であった」。

安沢秀一著『近世村落形成の基礎構造』吉川弘文館、1972。193～208頁。第四章第三節「特産物と商品生産」の項参照。

伊藤好一 前掲書、137頁。甲州都留郡鶴川村の場合、寛政2年(1790)戸数47軒で機台数131台。ほとんど全戸が機具を所有していたという。「寛政2年 鶴川村階層別機具所有状況」木村礎編『封建村落』。文雅堂銀行研究社、1958。

10. 農民層分解に関する論著は多数あるが、次の2冊をあげておく。新保博著『封建的小農民の分解過程』新生社、1967。山崎隆三著『地主制成立期の農業構造』青木書店、1961。
11. 『八王子織物史』580～582頁。「縞買の階層性—在方縞買をもって農民上層に属するものとは一義的にはいい難いように思われる。」「生糸商もまた大部分が中・小の石高階層に属する者達であった。」  
同上、435頁。「天保14年鎌水村生糸商人の持高・奉公人数」。
12. 山形県酒田の間間家が富農として上層に上昇したのは、中興の祖光丘翁の時代、宝暦期からであった。最初は西国から移住した太物商いの商人であったと聞いている。連光寺村奥右衛門家は元文5年名主忠右衛門家から分家し、「櫛木屋」を営む在方商人として蓄財し寛政期には本家をしのぐ富農層に発展した。
13. 『八王子織物史』261～266頁。
14. 生産性の上昇とそれともなう生産量の増大を、幕府はじめ支配領主は充分把握することが出来なかった。年貢定免制への移行は、かえって農民の手に残る余剰を増加させていった。これが農民的商品生産と地域商品市場の形成をうながしたのである。
15. 古くは野村兼太郎著『村明細帳の研究』をはじめ『農間渡世』についてふれている著書・論文は多数ある。ここでは『八王子織物史』242～250頁。「谷野村は高82石の小さい村で、家数35軒であるが、文政7年(1827)の農間渡世書上には、農業外生業・商業および手職を営むもの9軒もある。(そのうち安永5年からの菓子商渡世を除くと、すべて文化・文政期である。)」  
村上直編『近世神奈川の研究』252～253頁。(地方史研究叢書3)名著出版、1976。伊藤好一前掲書、104頁。「鈴木新田(戸数109)では文政10年に職人をも含めて31人もの農間渡世人を数えることが出来る。このうち酒・醤油・うどん・そば・荒物・諸色渡世の百姓勘兵衛と酒・醤油・穀物・荒物・紙・木綿類渡世の組頭吉兵衛の二人は安永7年(1778)に渡世を開始して最も古く、文化・文政期には農間渡世人が急激に増えている。」
16. 拙稿「近世後期における農民金融」(秀村選三・作道洋太郎編『近代経済の歴史的基盤』ミネルヴァ書房、1977所収)。この論文の史料は、国立史料館所蔵「富沢家文書」を利用したものである。本稿においても史料はすべて上記「富沢家文書」を利用している。
17. 拙稿「近世後期百姓の分散について」(慶応義塾経済学会、三田学会雑誌、64巻8号1969)。
18. 新保博著『近世の物価と経済成長』東洋経済新報社、1978。
19. 流通貨幣が「金」「銀」「銭」とそれぞれ異なる単位をもっている。便宜上時の「銭相場」によって「金」を「銭」に換算し、「銀」は1両=60匁替の交換比率を用い、すべて「銭」の単位に統一した。関東における「銀」遣いについては稿を改めて考察してみたい。
20. 拙稿「近世後期における農民金融」(秀村選三・作道洋太郎編『近代経済の歴史的基盤』ミネルヴァ書房、1977所収)68頁。第2表「規模別貸付件数及び貸付額」参照。
21. 熊井保稿「近世後期における農村金融」(津田秀夫編『解体期の農村社会と支配』校倉書房、1978所収)119～127頁。第9～13表「規模別貸付件数および貸付額」参照。
22. 植村正治稿「近世農村における金融貸借関係と訴訟出入」大阪大学経済学28巻1号、84～91頁。とくに「表8 中番村農民借財状況」「表10 貸付人別借財状況」参照。
23. 中村雄三郎・木村礎編「村落・報徳・地主制」東洋経済新報社、1776、127～139頁。とくに「第18表 幡鎌村借金戸数(明治3年)」129頁、及び「第22表 他町村の貸金主」139頁参照。
24. 大島真理夫著『近世における村と家の社会構造』御茶の水書房、1978。第十章「幕末における金融経営の展開」415～450頁参照。特に436頁第2表による「伝次郎『家』地域別利子収入(文久3～慶応元)」の利子合計から推計すると(利率12.5%として)当家の貸付金は合計で1000

両以上であったと思われる。

25. 福山昭著『近世農村金融の構造』雄山閣出版, 1775, 37頁。「第10表 貸付銀の地域分布」。地域別には居村とその周辺の交野郡の村々に貸付銀残高の90%が集中している。竹安繁治著『近世小作料の構造』御茶の水書房, 1968, 285～292。
26. 『八王子織物史』580頁。
27. 同上, 581～582頁。
28. 植村正治前掲論文, 78～81頁。
29. 『八王子織物史』396～398頁。
30. 同上, 228頁。「第41表 A 幕末期八王子周辺村々家数人数表」。
31. 同上, 244頁。
32. 同上, 245頁。
33. 拙稿 前掲論文 71頁。
34. 『八王子織物史』397～398頁。
35. 熊井保 前掲論文, 108頁。
36. 同上, 108頁。
37. 同上, 109頁。
38. 同上, 116頁。
39. 植村正治 前掲論文 78～81頁。
40. 拙稿 前掲論文 75頁。註11参照。
41. 本稿 表1・表2・表3参照。拙稿 前掲論文, 68頁参照。熊井保前掲論文, 119・122・123・125・127頁掲載の各表参照。
42. 植村正治 前掲論文, 74頁。「裁判権」の項参照。
43. 天明6年5月, 飯塚常之丞代官所武州多摩郡日野宿本郷の百姓宗次郎は, 連光寺村百姓8名を相手取り, 連光寺村支配地頭天野伝之助の役所へ, 売掛代金総額 18貫 418文の支払い方につき提訴した。これはそもそも宗次郎と同支配, 同郡本宿村の在方商人甚之丞の売掛金であった。宗次郎は甚之丞への貸付金のかたに, この売掛金の引渡しをうけたものである。これ以上の史料を欠くので, 訴訟の結末については不明である。売掛金の明細は次の通り。

又右衛門	錢	981文	四郎右衛門	錢	2貫622文
権八	〃	1貫502	勘十郎	〃	4・262
平兵衛	〃	2・279	佐次右衛門	〃	392
七右衛門	〃	6・145	常坊	〃	149
44. この訴訟の相手及び貸付金額は次の通り。

府中宿	彦六	金	30両 (文政13年3月貸付)
〃	〃	〃	20 (〃〃〃〃)
〃	藤十郎	〃	6 (〃〃11月〃)
四ッ谷村	長右衛門	〃	10 (〃6年)
日野宿	安兵衛	〃	20 (〃12年)
45. 『八王子織物史』594～603頁。「八王子横山宿成家は天保3年総借財2,289両1分と銀14匁8分で分散したが幕末には家運を挽回し, 横山宿の有力者たる往年の地位に復帰した」。
46. 拙稿 前掲論文, 107～108頁に史料全文を紹介してある。
47. 拙稿「近世後期における百姓の分散について」慶応義塾経済学会, 三田学会雑誌, 64巻8号, 1969, 87頁。

原稿受理 1980年1月22日

## The Development of the Rural Credit System in Premodern Japan

Mine Yasuzawa

In this paper, I intend to present some evidences of credit systems used in rural societies in premodern Japan. It was found that these made remarkable development through the last hundred years of the Tokugawa period. Toward the end of the eighteenth century, the rural society went through slow but basic changes in economic environment, followed by a dynamic alteration in the social and economic phases in the coming century.

The phenomenon first appeared in the spread and increase of a money economy to rural regions, due to an increase of agricultural production not only for land taxes and provisions but also to provide materials for industrial production. This means that the peasantry started the commercial agriculture for the local market. This new environment gave them greater influence as well as more possibilities of new types of work and life style.

By the end of the eighteenth century the peasantry no longer provided themselves with their products but began to obtain their daily necessities at the village shops or at the local market place where they took their products to sell. Some peasants worked as labourers, earning cash payment either locally or outside the village. Thus the demand for money in the rural regions increased along with the development of the money economy, which eventually brought forth the establishment of the financial market and the organization of a credit system in rural societies.

Those who accumulated enough capital through as local merchants or brokers started financial businesses as moneylenders, lending first to peasants in the neighbouring areas, then expanding their business to distant regions. The development of money lending and the credit system in rural societies has prospered since the turn of the nineteenth century.

In cours of time, the local merchants and brokers successfully freed themselves of the control of the central markets in large towns such as Edo, Osaka, Kyoto and other castle towns, and managed to gain the initiative at the local market. And their business activities were largely supported by the rural credit system in the local market.

Increased demand for consumption in the countryside spurred the peasants to borrow money as the standard of living of rural areas rose. It was found that the sum borrowed by a peasant in the same village as the moneylender lived, was smaller than that by a peasant in other villages, but the total number of cases was larger.

Contrarily, the financial relation between creditors and debtors in the distant areas was much more complicated as to the amount and the types of credit.

Although risks taken in using credit system were not always small, they were also safeguarded by the right to enter and abuse as a lawsuit when they arose. The increase of frequent lawsuits between creditors and debtors during the first half of the nineteenth century was so remarkable that one creditor was obliged to employ a person for bringing cases into court.

The rural credit system was based on the development of a money economy, which naturally brought forth the commercial farming and a consumer life in the rural society. This also resulted in enriching the local business and raising the standard of living of the peasantry.